参考資料２

令和４年度小笠原諸島世界自然遺産地域連絡会議
議事録

■日時令和４年 12 月 22 日（木）13：00～14：50

■場所小笠原世界遺産センター会議室／母島支所会議室／内地（Web 出席）

■議事次第

（１）管理計画の見直しについて

①管理計画見直し作業部会の振り返り

②管理計画改定骨子案概要について

③第３回管理計画見直し作業部会結果を踏まえた修正事項

（２）その他

■資料

資料１管理計画改定骨子案概要

参考資料１小笠原諸島世界自然遺産地域連絡会議設置要綱

参考資料２管理計画改定素案（基本理念及び基本方針）_1222 時点

■協議結果概要

○会議は公開（オンライン）で行われた。

○主な意見は以下のとおりであった。

（１）管理計画の見直しについて

①管理計画見直し作業部会の振り返り

・　説明に対する、意見及び質疑はなかった。

②管理計画改定骨子案概要について

・　現時点での基本方針素案を見ると、外来種の根絶は諦めているようにも見えるが、既侵入の外来種についてもきちんと力を入れていってもらいたい。

・　生態系の現状を踏まえると根絶は理想であって、もう少し現実を見据えた内容とする方が良いのではないか。

・　管理計画の計画期間が 10 年間であることを考慮すると、大きな干ばつや台風は確実にあるという前提で計画を作っていただきたい。

・　未侵入・未定着の侵略的外来種の侵入・拡散防止は、技術的な研究等に力点が置かれているように見えるが、これまでの 10 年を振り返ると、研究技術の問題もさることながら、体制や制度の問題が大きいのではないか。

・　地形・地質、生物多様性の再推薦に向けた評価を進めることについて賛成である。

③第３回管理計画見直し作業部会結果を踏まえた修正事項

・　「世界遺産ブランド」という言葉はかなり広義な意味を持つため、世界遺産ブランドとは具体的に何なのか、改めて議論する必要がある。

・　管理計画が 10 年先を見据えた計画書であることを踏まえると、「エコツーリズム」という言葉を使い続けるのか、もう一度考えた方が良いように思う。他の表

現があっても良いのではないか。

- 遺産保全に係る各種ルールや配慮事項に関する説明・普及啓発に関する記述の強化を検討とあるが、そもそも制限内容の変更が求められているのではないか。
- 観光客からの協力金の徴収については、観光協会の理事の間でも賛否両論あるが、島外居住者の反応を見ると、導入に当たって大きな問題はないようにも思える。
- 新たな資金確保にあたって、小笠原村にはふるさと納税に力を入れるなど、ぜひ先頭に立って進めてもらいたい。
- 属島で多数実施されている保全事業の状況は、島民には見えづらい部分がある。現状、兄島では最も多くの事業が行われており、工作物も多数設置されているが、台風で破損したり、担当が交代したりして、放置されているゴミも多い。これらへの対応について、設置した工作物の維持管理についても、管理計画に反映いただきたい。
- 今後の地域参画の方向性を関係者間で共有するためにも、主語や地域との役割分担はメリハリをつけて書くべきである。例えば、「生態系保全との関わりで生じる生活や農業等への影響の回避や低減への支援」であれば、管理機関は「影響を回避する」と明確に示すべきであると考える。
- 小笠原が地域外から見てどのような魅力を持っていて、どのように大事にされてきたのか、イルカのエコツーリズムをはじめとしたこれまでの経緯を振り返って、小笠原ブランドを見つめていけると良いのではないか。
- 母島については、誇りを感じられるような、陸の魅力が伝わるような場の整備も推進してもらいたい。実態が伴わない中で「誇り」と言っても理念的過ぎて、青い海、クジラなどが遺産価値だと勘違いされてしまうのではないかと思う。

（2）その他

- 該当なし

■議事録

○関東地方環境事務所・大森所長から挨拶

- お忙しいところ、小笠原諸島世界自然遺産地域連絡会議にご出席いただき感謝申し上げる。私は今年の 7 月から環境省関東地方環境事務所長に着任したが、残念ながらこれまで小笠原を訪問したことがないため、こうして皆様の議論の場に参加できたことを大変嬉しく思う。また、皆様には日頃から小笠原諸島世界自然遺産地域の管理にご協力いただき感謝申し上げる。
- 今年 9 月の西村環境大臣訪問に際し、ご協力いただき感謝申し上げる。大臣は小笠原に思い入れが深く、訪問後の記者会見でも、小笠原諸島世界自然遺産地域は、地域の皆様のご理解とご協力があってこそ成り立っている、との発言があった。

・ 小笠原の優れた自然環境を次の世代へと引き継いでいくためにも、環境省として一層力を入れていきたいと考えているし、皆様と一丸となって保全管理の取組を進めていくことが大事だと思うので、引き続きご協力いただきたい。
・ 私も 26 日の科学委員会に向けて、明日から小笠原に渡航して、父島、母島ともに訪問し、現地の状況をよく見てきたいと思う。今年度から小笠原諸島の保全管理の方針を定めた管理計画とアクションプランの見直し作業を進めており、すでに作業部会も 3 回開催し、多くの有意義なご意見をいただいていると聞いている。今回の管理計画の見直しに当たっては、地域の意見も反映しながらより良いものを作っていきたいと考えているため、本日は忌憚のないご意見をお願いしたい。

（1）管理計画の見直しについて

①管理計画見直し作業部会の振り返り

○小笠原自然保護官事務所・若松から説明を行った。
○説明に対する、意見及び質疑はなかった。

②管理計画改定骨子案概要について

○資料 1 に基づき、小笠原自然保護官事務所・若松から説明を行った。
・ 薮内（小笠原野生生物研究会）：p. 8 の基本方針案及び長期目標案を見ると、基本方針 1）は①生態系の保全と②未侵入・未定着の侵略的外来種の侵入・拡散防止で構成されているが、既に侵入した外来種への対応についても、項目を設定してはどうか。また、p. 7 の完成イメージにある文章を見ると、外来種の根絶は諦めているようにも見えるが、既侵入の外来種についてもきちんと力を入れていってもらいたい。
→若松（小笠原自然保護官事務所）：現在の整理では、基本方針 1）①生態系の保全に、既侵入の外来種対策も含んでいる。既侵入の外来種への対策は、外来種の駆除自体を目的としているのではなく、生態系の保護を目的として実施しているため、生態系の保全の項に整理したいと考えている。事業によっては、保全対策と外来種対策を一体として実施しており、書き分けが難しいものもある。一方で、島内の外来種対策については、もう少しトーンを強めても良いように思うので、長期目標や基本的な考え方にも反映していきたい。
→織委員（科学委員）：既侵入の外来種について、独立した項目としなくても、書きぶりで十分表現できると思うので、素案を見ていただきながら相談してもらえればと思う。
・ 筒井（小笠原村観光協会）：p. 7 はまだたたき台ということとは思うが、気候変動に関する記述として「気候変動の影響、津波、干ばつ、台風など、予期せぬ自然環境の変化による生態系への影響など」とあるが、管理計画が今後 10 年の方針をまとめるものなのだとすれば、干ばつや台風は確実に大きなものが来ると予期できる。絶対に来るものだという前提で計画を作っていただきたい。
→織委員（科学委員）：科学委員会でも報告したい。

・ 鈴木（小笠原自然文化研究所）：p. 7 についてはたたき台とのことなので、今後参考にしてもらえればと思うが、基本方針 1)②未侵入・未定着の侵略的外来種の侵入・拡散防止は、技術的な研究等に力点が置かれているように見えるが、これまでの 10 年を振り返ると、様々な外来種が侵入してくる中で、行政の縦割りで取り組んできたために、誰が何をしているのか、全体として侵入の状況を把握する仕組みがない。研究技術の問題もさることながら、体制や制度の問題が大きいのではないかと思う。その点について、管理計画で整理されなければ、技術があっても運用されないという、これまでの繰り返しになってしまうのではないか。

→織委員（科学委員）：今のたたき台では、技術的な部分にフォーカスしているが、制度や運用についても記述を入れるという点、事務局には留意して検討を進めていってもらいたい。

・ 渋谷（小笠原村）：p.8 の吹き出し「見直しの視点（１）②遺産価値」に関連して、村長から地域の皆様に話をしたい。私自身、村長になるまでの間、役場職員として世界遺産関連業務にかなり携わってきた。先ほどの説明にもあったとおり、推薦書の段階では今登録されている生態系以外に、地形・地質、生物多様性の 3 つのカテゴリーでの登録を目指したが、実際に登録されたのは生態系のみであった。生態系の維持にあたって、関係者の皆さんが日夜大変な思いをして取組を進めていることは承知している。ただ一方で、生態系のみでの登録となった際、地形・地質や生物多様性での推薦を目指していた先生方は非常に残念がっていた。近年の科学委員会では、特に地形・地質は再度登録を目指してはどうか、という意見も出てきている。当初は、今実施している保全対策や外来種対策が一定の落ち着きを見せてから再推薦をしてはどうか、との話もあったが、現状ではいつまでかかるかわからない。国内では、奄美沖縄が世界自然遺産に登録され、国内の世界自然遺産候補地は全て登録され、ある意味で一段落したことになる。7 月には環境省本省の局長、自然遺産担当の課長とも話をし、奄美沖縄の宿題が片付けば一段落するとの話をいただいた。また、8 月には可知委員長と吉田委員とも意見交換をし、科学委員の皆さんもぜひどこかのタイミングで再評価をしてみたいとの話をいただいた。さらには、9 月に西村環境大臣が来島した際に、環境大臣、奥田局長と立ち話をしたが、前向きな雰囲気を感じられた。そういった動きを踏まえ、管理計画にも遺産価値の再評価を行う旨、書き込んでいただいた。現時点では、すぐに再推薦を目指すというよりは、まずは改めて地形・地質や生物多様性の価値・ポテンシャルを評価するという想定である。

→筒井（小笠原村観光協会）：観光協会としては大いに賛成である。生態系は頑張って保全しているが、すでに危うい状況にあると思う。世界遺産というブランドを確固たるものとするために、2 本柱、3 本柱にしていくのは良いことと思う。

→中村（小笠原村観光協会）：ぜひお願いしたい。

→葉山（小笠原観光計画研究所）：筒井さんの発言にもあったとおり、生態系については危うくなっているというのが、関係者の共通認識だと思う。管理計画でも根絶は理想であっ

て、もう少し現実を見据えた内容とする方が良いのではないか。

→渋谷（小笠原村）：筒井さんや葉山さんの発言の趣旨はよくわかるが、再評価や再推薦を進めていく際には、生態系が危ういから他のカテゴリーにも目を向けるというのではなく、改めて価値を評価いただき、十分な価値があるから再推薦するという意識・認識を持ってもらいたい。また、国内では地形・地質として登録された世界自然遺産はないため、国内初の登録を目指すべきなのではないかと考えている。

→織委員（科学委員）：まずは科学的、客観的に価値を評価していくということだろう。

③第 3 回管理計画見直し作業部会結果を踏まえた修正事項

〇資料 1 に基づき、小笠原自然保護官事務所・若松から説明を行った。

・ 中村（小笠原村観光協会）：p.9 で「世界遺産ブランド」という言葉が使われているが、「世界遺産ブランド」という言葉はかなり広義な意味を持つと思う。地域連絡会議に関わっている関係者の中でも、共通認識を持てていないのではないか。今後、AP 等のより具体的な話に落とし込んでいく際には、世界遺産ブランドとは何なのか、改めて議論する必要があると思う。ブランドとは、あらゆるステークホルダーへの約束と言われている。島民、来島者、関係者に対して、世界遺産ブランド、小笠原ブランドが何を約束してくれるのか、意識しながら議論していく必要があると思う。

・ 筒井（小笠原村観光協会）：管理計画が 10 年先を見据えた計画書であることを踏まえると、「エコツーリズム」という言葉を使い続けるのか、もう一度考えた方が良いように思う。他の表現があっても良いのではないかと思う。

→織委員（科学委員）：エコツーリズムという言葉は、どこか使い古された言葉のように感じる部分がある。管理計画の基本方針の中で、遺産価値を持続的に維持していくという意味で、レスポンシブルツアー、サイエンティフィックツアーも含めて、様々なツアーがある中で、エコツーリズムという言葉を使い続けることについては、改めて検討する必要があると思う。ブランディングについては、漁協も関連する点があるかと思うがいかがか。

・ 新島（小笠原島漁業協同組合）：中村さんの指摘は非常に重要だと思う。漁協としても小笠原ブランドという言葉を使うときに、何についてのブランドなのかを説明するのは難しい。そのあたりを具体的に示していけると良いと思う。

・ 瀬古（小笠原アイランズ農業協同組合）：農協としても農作物をブランディングしていく際には、地域全体で共通認識を持った上で、商品開発をしていけると良いと考える。

・ 門脇（小笠原アイランズ農業協同組合）：中村さんのご意見に賛成する。小笠原において世界自然遺産ブランドと言うと、世界に認められた大自然の中で育った貴重なもの、といったものになるとは思うが、より具体的に関係者で共有できるようになると良いと思う。

・ 織（科学委員）：「世界遺産ブランド」や「エコツーリズム」について、せっかく管理計画に記載するならば、皆さんが納得できるように形作っていくことが重要と考える。世界遺産ブランドであれば、知床も含めた他地域の事例が参考になると思う。

・ 織（科学委員）：. p10 についても小笠原村観光協会から意見があるようだがいかがか。

→中村（小笠原村観光協会）：意見というよりも質問であり、補足資料に書かれているとおりである。

→織（科学委員）：遺産保全に係る各種ルールや配慮事項に関する説明・普及啓発に関する記述の強化を検討とあるが、ルールの説明よりも、そもそも制限内容の変更が求められているのではないか、とのコメントをいただいていた。

→若松（小笠原自然保護官事務所）：作業部会において、ルールの徹底についてのご意見をいただいていたため、その点については何らかの記載の追加をしたいと考えている。同時に、現行の規制内容が適切なのか、過剰な部分はないのか、といったご意見もいただいているため、管理の方策の部分に落とし込めるかどうか、現時点では即答が難しいが、制度を適正に運用する等の表現は工夫していきたい。

→織（科学委員）：遺産保全のために設定された行動・行為制限等の必要性を明確にしていくこと、過度な制限にならないよう利用と保全のバランスを取っていくといったことは、管理計画に反映できるのではないか。

・ 辻井（OWA）：p. 11 の「レスポンシブルツーリズム」について補足をすると、地域が多大な努力をして世界遺産の価値を保全している現状の中で、観光客にも協力をいただくことで、地域内外で一体となって自然環境の保全に取り組んでいければという思いを込めてこの言葉を提案した。新規事項として加えていただいてありがたい。

→織（科学委員）：地元住民だけでなく観光客も含めて遺産管理に係るステークホルダーとして扱う、観光客も遺産管理に対して一定の役割を果たしていくべきである、という考え方は、世界的なトレンドでもある。また、レスポンシブルツーリズムは、サイエンティフィックツーリズムがベースになるとの議論もある。

・ 中村（小笠原村観光協会）：レシボンシブルツーリズムの中では、ツアー参加者から協力金の徴収なども考えられるが、協力金の徴収については、観光協会の理事の間でも賛否両論ある。レスポンシブルツーリズムが世間に広まりつつある中で、みんなが快くお金を払ってくれるのかどうか、観光客の感覚を把握したく、自身のツイッターでアンケートを取った。その結果、意外にも払うべきである、あるいは払うのは仕方がないとの回答が 8 割を超えた。これを根拠に協力金制度の導入を進めることは早計かと思うが、世の中のトレンドにあわせていっても問題はないように思えた。

→織（科学委員）：レスポンシブルツーリズムは、協力金を払うことだけでなく、外来種を持ち込まない、外来種の駆除に協力するといった行動での協力でも良い。協力金については、富士山、知床、奄美等で実施されており、大学の研究等によるアンケート調査も行われている。それによると、協力金の金額についても価値観の分かれるところである。小笠原については、もともと旅費が高いことから、観光客の意識もある程度高いのではないかと予想する。レスポンシブルツーリズムの具体的なイメージについて、皆さんで十分に議論いただけると良いと思う。

→若松（小笠原自然保護官事務所）：レスポンシブルツーリズムについては、象徴的な言葉として管理計画にもぜひ反映させたいと考えているが、ご指摘のとおり幅広い意味を持つ言葉のため、資金確保に関する事項も含めて、取組の推進に繋がるような書きぶりとしたい。

・ 葉山（小笠原環境計画研究所）：新たな資金確保にあたって、小笠原村にはふるさと納税に力を入れるなど、ぜひ先頭に立って進めてもらいたいと思う。

→渋谷（小笠原村）：協力金や入島税に関する議論は、以前から行われてきたが、私が村長になる直前の副村長時代に、協力金等の導入ではなくふるさと納税の強化を選択した。ちょうどその頃、寄附金額に対する返礼品の金額の割合を上限 3 割とする規定が加えられたため、感謝券の発行や返礼品を地域から募るなどして、取組を進めている。今、ちょうど年末の駆け込みで、ふるさと納税の申込があるが、先日時点で 1,000 万円を超えているとのことである。取組を強化する前は年間数 100 万円程度だったため、すでに大きな飛躍だが、さらに船会社や観光協会にも協力いただき、観光客に対して現地到着後の寄付を呼びかけることで、金額を伸ばしていきたいと考えている。強制ではなく自らの意思で資金提供いただく方向性にしていきたい。

・ 筒井（小笠原村観光協会）：p.13 に関連して発言したい。世界遺産に登録されたことで、多くの観光客が訪れて生活が豊かになったり、保全事業によって雇用が増えたり、地域に対して様々な効果があったと思う。一方で、属島で多数実施されている保全事業の状況は、島民には見えづらい部分がある。一つの例として、事業ゴミの問題である。現状、兄島では最も多くの事業が行われており、工作物も多数設置されているが、台風で破損したり、担当が交代したりして、放置されているゴミも多い。これらへの対応について、管理計画にもぜひ反映いただきたい。

→若松（小笠原自然保護官事務所）：行政が実施した保全事業であれば、ゴミの処理まで含めて行政が責任を持って行うべきと考える。一方ですぐの撤去が難しく、そのまま残置していたり、残置すらできておらず飛散していたりするものがある現状は把握している。個別具体の事象のため、基本方針ではなく管理の方策に反映できればと思う。保全の事業がマイナスにならないように、少しでもマイナスの部分を減らせるように、といった方向性がわかる書きぶりとしたい。

→織（科学委員）：放置されているものの情報はあるのか。

→若松（小笠原自然保護官事務所）：把握しているつもりではいるが、完全とは言い切れない。

→筒井（小笠原村観光協会）：おそらく把握できていないものがたくさんあるように思う。ただ、行政に限らず見つけた人が写真や GPS で記録を取ってくるなど、できることはあると思う。見つけたものの情報を共有する場、所在者を確認する場を設けることは、管理計画に書かなくてもすぐにできると思うので、ぜひ進めていただきたい。あわせて、今後も属島で工作物設置が予定されていると思うので、設置した工作物の維持管理についても、

管理計画に何らかの記載があると良いと考える。

・ 織（科学委員）：この点に関して、林野庁や東京都からもコメントいただきたい。

→尾山（森林生態系保全センター）：林野庁では大きな工作物はあまり作らないし、指定ルートも近自然工法で施工しているため、問題になることは少ないと思う。

→寺尾（小笠原支庁）：我々も属島で工作物を作ることがあるが、維持管理を軽んじてはいけないと認識している。まずは情報共有のスキームが必要だと思うし、これから施工するものについては、台風被害等を考慮した維持管理計画を整理したい。

・ 金子（小笠原村）：管理計画見直し作業部会は、座長として関わらせていただいた。作業部会には、今日も出席いただいている多くの皆様に参加いただき、感謝申し上げたい。個別のご意見をたくさんいただいている中で、今後、どのように遺産に関わり続けてもらうかということを考えると、実際の行為そのものと同じくらい、人の心が大事だと考えたため、あえて「地元愛」のような言葉を加えてはどうかと提案した。

→織（科学委員）：具体的な文章はこれから精査していくことになると思うが、制度等に加えて人間の気持ち・思いのようなものが盛り込まれた温かみのある管理計画になると良いと考える。

・ 大津（小笠原村産業観光課）：エコツーリズムの推進に関する文言については、エコツーリズム協議会事務局として、かねてから意見を述べてきた。エコツーリズムは遺産を損なったり消費したりするようなネガティブなものではなく、遺産価値を高めるポジティブなものであると考えている。外来種駆除体験プログラムへの参加や募金、SNS 等での情報発信等をしてもらう気持ちを醸成するような書きぶりになればと思う。個人的には、持続、サスティナブルという表現は、先細りのものを何とか永らえさせるようなニュアンスも感じる。「観光による自然環境への影響を最小限しつつ」という表現についても、山に入るなどの観光の一側面を見れば、自然環境への影響がないわけではないが、観光が悪影響を及ぼすものではなく、遺産価値を高めるものであるということが伝わるような表現としてもらいたい。また、「エコツーリズム」という文言については、産業観光課で観光振興ビジョンを検討する中でも、他の表現を探したが、なかなか良いものが見つからない。良い表現があればぜひご教示いただきたい。

→織（科学委員）：先ほどの世界遺産ブランドと同じく、レスポンシブルツーリズムやエコツーリズムとは何か、今後引き続き議論していくのが良いだろう。現在、村の観光振興ビジョンを検討しているとのことだが、観光振興ビジョンと管理計画は決して切り離せるものではないので、両計画の連携についても管理計画で言及できると良いかもしれない。

→大津（小笠原村産業観光課）：ぜひ連携していければと思う。

・ 鈴木（小笠原自然文化研究所）：p.10 に「生態系保全との関わりで生じる生活や農業等への影響の回避や低減への支援」とあるが、主語は管理機関と言うことで良いか。「影響の回避や低減への支援」という表現が、回避への支援と低減への支援を行うようにも読めるが、管理機関には「影響の回避」と「影響の低減への支援」をお願いしたい。民間活用や

資金獲得の項目においても、主語が曖昧になっていると今後の協働の方向性が見えにくい。遺産登録から10年が経過し、生態系保全の取組により外来種対策が進み、ほとんどが良い方向に進んでいるとは思うが、一部はその変化に追いつけずに、農業等に影響を与えている現状もある。管理機関は「影響を回避する」と明確に示すべきであると考える。管理機関と地域の役割分担や主語はメリハリをつけて書くべきである。細かな書きぶりの問題なので、今後議論できれば良いと思う。また、どうしても世界遺産の登録以降の話に終始してしまいがちが、小笠原が地域外から見てどのような魅力を持っていて、どのように大事にされてきたのか、イルカのエコツーリズムをはじめとしたこれまでの経緯を振り返って、小笠原ブランドを見つめていけると良いのではないか。世界遺産への推薦や登録に繋がった地域性や歴史を整理しないともったいないと思う。

・ 葉山（小笠原環境計画研究所）：今回キーワードとして「誇り」という言葉が出てきたが、母島については誇りを感じられるような場所の整備や提供にも力をいれていただきたい。母島は、国立公園、世界遺産でありながらその魅力を手軽に感じられる場所がない。なぎさ公園ですら草刈が行き届いていない状況である。実態が伴わない中で「誇り」と言っても理念的過ぎて、青い海、クジラなどが遺産価値だと勘違いされてしまうのではないかと思う。母島については、陸の魅力が伝わるような整備も進めていってもらいたい。

→若松（小笠原自然保護官事務所）：遺産価値を展示や説明で紹介するだけでなく、一般観光客にも実際に触れてもらえる、体験できる場所を設けるというのは、小笠原諸島全体での課題であり、特に母島では課題が大きいと思う。科学委員会では、母島施設の整備についてもご意見をいただいている。具体的な方策については今後検討が必要だが、いただいた視点は管理計画に反映できればと思う。

→織（科学委員）：父島中心で議論するのではなく、常に母島にも目配りをすることが重要と思う。

・ 若松（小笠原自然保護官事務所）：「人と自然の共生」については、みなさんのご意見を反映しながら良い形になりつつあると感じている。一方で、「エコツーリズム」については、まだまだ議論・精査が必要と考えている。村で整理している観光振興ビジョンは年度末に取りまとめ予定と伺っているため、観光振興ビジョンとの整合や書き分けも考慮しながら、管理計画の取りまとめを進めていきたい。

（２）その他

〇報告事項等はなかった。

〇小笠原村・渋谷村長から挨拶

・ 本日は、先ほどお話した地形・地質、生物多様性に関する再評価の件が最もお話ししたかったことである。これについて環境省や林野庁で再評価をした上で、推薦に向けて検討いただきたいと思う。また、作業部会へのご協力についても感謝申し上げる。このあと、作

業チームや事務局の作業に多少時間がかかることと思うが、管理機関で協力してぜひ良いものを作っていってもらいたい。

・ 私の挨拶はここまでにして、関東地方環境事務所の立田次長からもコメントいただきたい。

○関東地方環境事務所・立田次長から挨拶

・ 自身は、2009 年～登録 1 年後まで小笠原を担当していた。当時は、まだまだ取組が不十分と感じていたが、その後、長崎など他の地域に赴任してみると、小笠原のみなさんの世界遺産への関心の高さを実感した。かつての住民説明会等では、遺産登録に失敗して足を引っ張ったらどうするのか、という話もあったが、10 年経って世界遺産を活用していこうという流れになっていることは嬉しく思った。また地形・地質、生物多様性については、前回の推薦時、科学的な根拠や説明が足りていない部分もあったと思う。遺産管理の上ではまだ課題も多いとは思うが、みなさんが活発に議論いただいている姿を見て安心した。7 月に着任したばかりなので、今後しばらくよろしくお願いしたい。

以上